



筑紫女学園大学リポジット

On 'Compressed Modernity' in India : Emergence of Volunteer Sector as Communitarian Sphere

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 喜多村, 百合, KITAMURA, Yuri メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/116

インドの「圧縮された近代」論をめぐって

- コミュニタリアンの領域としてのボランタリー・セクター生成を中心に -

喜多村 百合

On 'Compressed Modernity' in India : Emergence of Volunteer Sector as Communitarian Sphere

Yuri KITAMURA

はじめに

この論考は、Chang Kyung-Sup[Chang 1999, 2010]が提示した「圧縮された近代(Compressed Modernity)」論に基づき、これをインドに適用した場合に見えてくる普遍性と特殊という試論的位置づけを持つ。Chang が論じる「圧縮された近代」論は、西欧社会が約200年かけて実現した「近代」を、半世紀という「圧縮された時間」で達成した韓国社会の近代化過程の特徴とその問題性を指す用語として使用されている。一方で Chang は、2010年の著書で、韓国の家族制度が「圧縮された近代」の制度的後ろ盾になり、経済発展を支える制度として機能している点とその問題性を指摘する。家族中心的な思考・行動様式の強力な機能が、それを越えたコミュニタリアンの領域の創出を準備しない点を、筆者はインドの近代化過程の対比の中で争点化する。部分的なりとも市民社会的空間として植民地支配期に立ち上がり、独立後政府の福祉政策の一翼を担い、一方で国際開発協力の流れに乗り NGO 大国とまで呼称されるようになったインド社会のアソーシエーションとしてのボランタリー・セクターとの相違について検討するのが目的である。

特にこの論考では、これまで各論的とされた家族・女性・ジェンダーが実は近代化プロセスにきわめて大きく関わるファクターであることを強調しながらも、インドにおける「圧縮された近代」が Chang が指摘する韓国社会のそれと異なった道筋を示すことをねらいとする。

1. CKS の「圧縮された近代」論：二つのフェーズ

この論考では、Chang による「圧縮された近代論」を援用する。主な議論は、1999年の著作『Compressed Modernity and its discontents: South Korean Society in Transition』[Chang, 1999] と、2010年の『South Korea under Compressed Modernity: Familial Political Economy in Transition』[Chang, 2010] に示される。以下に、Chang の主たる議論を掲げる。

1999年の議論は、いまだ記憶に新しいアジア地域を襲った1997年の金融危機により経済危機に陥った韓国社会に関し、それまでたどった近代化プロセスに対しての批判的分析に基づいている。

韓国は屈辱的な IMF の緊急支援を受けることにより金融危機を乗り越えたが、条件であった福祉・労働部門の予算削減を伴う構造調整策の導入はその後の就労環境、福祉政策に大幅な制限を加えた。その意味で、1960年代以降破竹の勢いで成長を遂げてきた韓国の経済発展を根本から逆行させる危険性ははらむものであった。この危機をもたらしたアジア金融危機を機に、1960年代以降の奇跡ともいえる爆発的な近代化過程として Chang が呼ぶ「圧縮された近代」自体に、経済的生活だけではなく、社会的、政治的、文化的生活に、さまざまな危機的帰結をもたらしかねないディレンマが内在すると主張した。政治上の家父長的権威主義、財閥独裁による独占的企業経営、労働力の排他的乱用、基本的福祉権の不履行、「自己イメージに対するオリエンタリズム」などが、その各論的根拠として批判的に示され、急速に進展した近代化のプロセスから重層的に析出する試みがなされている。破竹の勢いで成長し欧米をモデルに近代化する韓国において、エリート層が描いた自画像は、旧来の文化や社会、経済・政治システムの蔑視と非合法化に基づいて構成されていくという、自己へのオリエンタリズム的まなざしの中で作られていったと指摘する。

Chang が自身の論考で援用するヒルシュマンは、南米における急成長の持つコミュニケーション効果について次のように指摘する。

「急成長により、国や都市の経済変化と平行する物理的变化は明白であり、進歩への期待や可能性は説得力を持ってさまざまな集団や個人に伝達される」[Hirshman 1979]

これがまさに韓国や他の急速に経済成長するアジア社会に生じている、とする結びは、その後の Chang の考察上の予見を示唆するものである。

次に Chang が2010年に出した『South Korea under Compressed Modernity: Familial Political Economy in Transition』の論考では、「圧縮された近代」現象を、移行する家族政経論の観点から論じており、前著では必ずしも明確ではなかった概念規定を含め、より説得力を持った論考がなされている。家族制度という、近代化論ではマイナー変数として扱われていた領域を主流に持ち込むことにより、この議論をより一層包括的に成立させている。さらに家族論を中心テーマに据えることにより、近代化を主に公的領域において考察し欧米社会の経験と比較した旧来の分析をより精緻化し、欧米における家族論を含めた近代化論が、非欧米社会では必ずしも当てはまらない点を強調するという大きな挑戦をしている点が特徴的である。

論考の構成は以下に示すとおりで、前世紀末から学界に登場する家族論の新たなアプローチを踏まえて行われている。その新たな枠組みとは、私的領域のみならず、社会のあらゆる秩序に明確に表出する家族主義的屬性という枠組みの議論への組み込み方に示される。

その一つの流れが、初期中産階級と階級形成に果たす経済的基盤として家族・世帯が持つ重要性への着目で、西欧産業革命期の草の根（家族の歴史）の経験の再構築や家族の分析単位化を通して行われた。また第三世界の構造的未発展に関する、農民や都市貧困層の家族中心的対応という現象も検討された。さらに、労働者と資本家の階級コンフリクトに注目した産業資本主義の変容を種種の家族問題から分析するというアプローチも現れた。近代国家の特性を、社会政策に特徴付けられる国家と家族の関係から検証する研究も出現した。

韓国社会をこの枠組みにしたがって分析した Chang は、以下のような構成で論を進める。

- (1) 価値、イデオロギー、制度における偶発的複数主義
- (2) 制度的計画とマニュアルな学び
- (3) 生産バイアスと再生産における危機
- (4) 部分的社会変化と複雑な社会的役割
- (5) 伝統（土着）的要素と近代（外来）的要素の対立
- (6) 政治経済的集積
- (7) 圧縮された脱家族化

このように、旧来の家族社会学的アプローチだけでは踏み込めなかった経済現象を、社会史、政治経済学、政治社会学、経済人類学、政策研究という多層的アプローチを組み込むことにより有意に分析している点が評価される。ここで検討を要する課題として筆者が指摘できるとすれば、それは次章で筆者が展開するインドの近代化論の論考で示す歴史的近代、つまり筆者が暫定的に「跛行的近代」と呼ぶプロセスに関する韓国社会の経験であろう。

この Chang の論考で、筆者がインドの近代化過程との対比で最も注目するのは、Chang が韓国における「圧縮された近代」論で最も警告を発している問題の一つとしてのコミュニタリアンの領域の創出である。欧米社会が体现する公共圏や親密圏、またそれらをつなぐ NPO/NGO などのボランティア・セクターが生成・成熟する以前に、私的領域が解体され「社会的紐帯の真空化」とも呼ばれる現象が起きつつあるとする点である。Chang は、これが日本や中国にも指摘され、今後東南アジアで最もそれに近い事例としてのタイも含まれる可能性を示唆している。

2. インドは「圧縮された近代」社会か

1991年に市場開放を骨子とする新経済政策が導入されて以来、空前の経済発展を続けるインド。IT や化学、繊維産業を中心に、毎年年率 8 % の高い経済成長を遂げてきた。われわれと変わらない消費生活を享受する「中間層」も 2 億人を超えた。では、この高い経済成長を背景に、インドの近代化のプロセスは、韓国と同様に猛スピードで進行しているのだろうか。また、早晩、韓国が経験したような「圧縮された近代」の負の側面を表すようになるのだろうか。

インドの近代化のプロセスは、歴史的により早い段階に発生している。イギリスの植民地支配により、植民地行政など近代セクターを担う人材養成をはじめ、鉄道・通信網など基本的なインフラの整備、英領インド後期には民族資本による近代産業の勃興など、筆者が呼ぶところの「跛行的近代化」をインドは経験した。つまり社会全般に近代化が行きわたったわけではないが、宗主国に最大の利益をもたらすべく意図された植民地経営上必要最低限かつ制限された、人口の一部が関わる近代化の実現であった。それは被支配者であるインド人側にも認められるプロセスであり、進行する植民地化に呼応し生じている。そこでは、植民地社会で自己を地位上昇も含めて積極的に位置づ

けようとするインド人側の思惑や、自社会の再検討することで社会改革に働く動きなどが含まれた。このような宗主国主導のいびつな近代化プロセスと、内部から起こる近代化プロセスにかかわったインド人エリートから中間層が形成され、植民地支配への批判がおり、やがては民衆を巻き込んだ民族運動を起し独立を勝ち取っている。

その意味において、インドの近代化は他の非西欧社会と比べて、局所的ではあるものの極めて早い段階から社会に確立されてきた。このような近代化への対応や達成という歴史過程を踏まえると、インドの近代化は韓国社会ほど「圧縮」された形で急速に生じたものではない、というのが筆者の見解である。現在インドは急速な経済発展のさなかにあるが、植民地期にすでに「跋行的近代」を経験したインドは、韓国と同様の道筋をたどるという予測が留保される由縁である。

Chang の指摘した家族エゴイズムと呼ばれる、近代化プロセスの促進に働く強力な家族制度と、コミュニタリアンの空間の生成不可能性に対しては、筆者は以下のように考える。つまり、インド社会は韓国同様の強固な絆による家族観を有しながら、一方でアソーシエーショナルな関係性の創出を可能とする条件を持っているという点である。それは伝統的カースト組織と近代的運動がもたらした独立後政策的に作られてきたボランティア・セクターが、バランスをとりながら活動していると考えられる。この点については、次章で事例を示す中で論じたい。

「地域性への配慮」

Chang の包括的な議論では抜け落ちる論考としての地域性について、ここで指摘しておきたい。インドは、アジアにおける「緩やかな欧州連合 (EU)」とも評され、他の南アジア諸社会にも多かれ少なかれ共有される属性を持ち、地域差が常に議論の前提となる点を強調したい。ここでは、筆者が調査したグジャラート州とケーララ州を対象とした論考を展開したい。

グジャラート州は、ヒンディーベルトにつながる州であり、その意味で北インドの基層文化・社会的特徴を基本的には備えているといえる。一方で植民地期から近代産業振興や商業的拡大、移民送出などにおいて際立った位置づけを持っており、他のヒンディーベルト諸州とは異なった特徴も示している。政治的にはヒンドゥー原理主義政党が州政権を掌握しており、しばしばコミュニズムが浮上する地域でもある。後半で議論するコミュニタリアンの組織としての NGO を取り巻く状況についても、「NGO 大国」インドを体現するといっても過言ではないほど、多くの NGO が稼働している。

一方のケーララ州は、インドの中でも、また南インド諸州においても、歴史的文化的独自性が際立つ地域といえる。シリア派キリスト教が A.D.70年に伝播したとされ、植民地期の改宗も含めて多くのキリスト教人口(19%)を抱え、ムスリム(24%)と、マジョリティのヒンドゥー教徒と共存的なコミュニティを創出し現在に至っている。村むらに見られる教会をはじめとして、クリスマスを祝うなどケーララのひとびとの生活に深く埋め込まれている。ムスリム人口も、沿岸漁民を中心に、24%と際立って多い。「村の一つの通りに、ヒンドゥー寺院とモスクキリスト教会が並んで建つ」といわれるほど、不可触民や低カーストも含め、グジャラート州では想像不可能な共存空間が成立している州と言える。政治的には、1968年に樹立した共産党連合政権と、国民会議派連合政権が、

二大政党制のように5年おきに政権交代して現在に至っている。経済成長に過度に依存することなく、高い社会指標(特に女性)を達成した点でも、理想的な開発「ケララ・モデル」として知られる。

3. インドが作り出すコミュニタリアンの領域としてのNGOとその特徴

現代市民社会におけるボランタリー・セクターの活動は、工業先進国や途上国の別なく極めて大きな位置を占め、その役割上の重要性が強調されて久しい。本来は近代以前の村落共同体に埋め込まれていた相互扶助制が、より近代的な機能を備えシステム化された公的組織として成立し稼働しているのがNPOやNGOであるといえる。南アジア諸国、特にインドにおけるボランタリー・セクターの活動はすでに述べたように長い歴史を持ち、植民地宗主国イギリスの支配からの権利委譲のプロセスの中で生成されていった。また独立期インドで、ネル 政権で、中央社会福祉庁の下部組織として官製NGOが10,000という規模で誕生し稼働している。また国際開発協力の現地化が多く、ボランティア組織を生み、現在では数万にもおよぶ組織が全インドの津々浦々で活動しており、その活動分野や形態も多岐に渡っている。

この章では、多くのボランティア組織の中でも家族・女性・ジェンダーにもっともかわりの深い組織に注目し、西インド・グジャラート州と南インド・ケララ州における展開を考察する。

(1) SEWA 自営女性協会(グジャラート州アフマダーバード市)



「SEWA モービル・バンクに集まる会員たち：筆者撮影」

理念・組織・活動経緯

SEWA は、未組織部門の女性の職業組合として1972年にグジャラート州アフマダーヴァード市に設立された。設立者は、インド最古の労働組合であるインド繊維労働組合 TLA (Textile Labour Association: 1916年設立) で女性部門を担当していた弁護士のイラ・バットである。きっかけは、零細自営で生計をたてる女性たちがバットに協力を求め、女性の地位向上に強い関心を持っていた

バットが組織化を促したところにある。貧しい自営女性やその家族が抱える問題は、露店商や行商が直面する場の権利、斡旋業者の収奪といった就労上のものから、保健・保育を初めとする家族生活の問題まで多面的に構成されていた。加えて住まいで働く家内職人が際立って多いことから、就労環境など、問題は複合的に絡み合っていた。こうした問題に日々苦しむ自営女性たちとバットの問題意識が合致し、組織化に働いたのである。

ガンディー思想を標榜する SEWA は、設立以来自営女性のニーズに基づいた、会員主体による労働組合・協同組合・女性運動（合同運動）を行い、自営女性の権利と社会保障の獲得を目指してきた。会員数は約69万人、うちグジャラート州で47万人、農村会員が6割を占める（表参照）。マディヤ・プラデーシュ州やケーララ州などにも支部がある。

正規の雇用主を持たない会員は、もっぱら政府を相手取り、最低賃金の徹底や、場の権利、警官による嫌がらせの取り締まりなどを要求した。また生活環境の改善もあわせて政府に対し要求してきた。

SEWA は、合同運動に加えて、保健衛生、法的支援など多くの支援事業を実施している。その中でも、1974年に設立された SEWA 協同組合銀行による小規模融資・貯蓄事業が画期的である。金融機関と無縁の自営女性は、元手の確保や緊急時の出費に困難を抱えていた。そのニーズから設立された SEWA 銀行は、半年でつぶれると言われたが、今では17万人を越える会員が口座を持ち、97%の返済率を維持し二号店の建設計画もある。男性がもっぱら金銭管理を行っていたインド社会で、女性のための貯蓄・融資機関の実現により、貧しい自営女性が起業に融資を受けたり、家計管理能力獲得の機会を得た。起業についての技術指導も行われるなど、途上国の女性開発に重要なモデルを提供し貢献している。

さらに1979年より農村開発に着手し、手工芸協同組合や酪農協同組合の運営の他、政府系農村開発プログラムの橋渡しをしている。協同組合活動により、収入が安定し、他地域での季節就労も激減した。また、女性が収入創出活動を通して、保守的な村落機構の中でも、生産活動や意思決定ができるようになり、女性の自信につながっている。

こういった地域ベースの主たる活動に加え、目的を同じくする他の NGO と協力しながら SEWA は積極的に中央政府に対し、自営者の権利と保障に関する政策提言活動を実施してきた。この継続的な発言が認められて、1987年には自営女性に関する政府委員会（委員長イラ・バット）による自営女性の実態調査を全国規模で実施し、報告書と提言書をまとめている。その後、自営者の権利や福利厚生に関する政府委員会に、SEWA のオーガナイザーが委員として参加し、政策策定につなげる試みがなされている。

また他国の NGO とも協同し、国際レベルでの政策提言活動を実施し、労働機関（ILO）における家内労働者条項の採択（1996年）に尽力し、自営者の可視化と保護に貢献した。

近年の活動の特徴

ここでは、SEWA に新しい展開をもたらし、規模が拡大する要因となった二つの出来事に触れる。さらに国際レベルにおける未組織部門労働の保護政策策定に向けた提言活動を検討し、国内・国際

レベルにおける SEWA の活動の可能性と課題について考察する。

SEWA は、インド西部大地震（2000年）とコミュニリズムとしてのゴドラ事件（2003年）に対応することで、活動範囲をさらに拡大し会員数を倍増させた。インド西部大地震では、当初は被災地での会員家族の緊急支援を実施したが、当事者の関心がより中長期的な生計維持にあることが判明した。したがって、生産的な収入創出活動の導入を行った。また被災者の会員だけに限定せず、支援を行った結果が新入会員の増加につながったといえる。

ゴドラ事件では、避難所のイスラム教徒会員に対しさまざまな支援活動を行う中で、やはり会員の増加を見ている。この活動は現在も続けられ、アフマダーヴァード市では両コミュニティの境界に事務所が作られ、保健活動をはじめとするさまざまな活動が導入されている。両コミュニティの祝祭日には、両者が集って祝うことなどを通し、両コミュニティの平和を回復し交流する試みが重ねられている。

国際レベルでの活動を SEWA は設立当初より重視し積極的に取り組み、労働法のらち外にあるインフォーマル部門の女性労働者の権利と保障をもとめる政策形成をめざした提言活動を行ってきたことを前節で触れた。それをさらに押し進めたのが WIEGO（Women in Informal Employment Globalizing and Organizing）である。1997年に SEWA とハーヴァード大学、UNIFEM により設立され、他の NGO とのネットワークを通してインフォーマル部門の女性労働者に関する統計整備、研究を踏まえて、国際機関に政策形成を促す活動を進めている。

コミュニタリアンの領域に関する考察

SEWA は組合員数が百万に達し 8 州に姉妹組織を持つ巨大組織に成長しているが、日常的にはカーストと宗教コミュニティに基づいた地域ベースの協同組合運営が行われている。その上位組織として、宗教的にも社会階層的にも異なったコミュニティ出身のメンバーにより、職業組合が組織されている。（設立初期にはコミュニティ間の反目もあり、高カースト高学歴のオーガナイザーが調停役を果たした。）SEWA では、「母の家」と形容される気兼ねない家族的エートスが重視され、「姉妹」である会員同士の協力関係が強調されてきた。したがって SEWA が関わる問題は、一義的には「完全雇用」としての経済的自立であるが、インドの零細自営者の労働形態の特殊性は、親密圏をも巻き込み、そこに生じる問題の解決と環境改善が重視されてきた。

このように SEWA 運動は地域をベースに展開されているが、一方ではグローバル化がもたらす産業や雇用にもたらす弊害についても国際的に早くから発言している点を強調しておきたい。ILO 規約の家内職条項の採択や、WIEGO の活動にそれが反映され、SEWA の主張は国際コミュニティにまで及んでいる。グローバル化で職を失う零細自営者をあらかじめ保護する国際労働政策を絶えず提言してきた点に示されている。

(2) SAKHI（ケーララ州ティルヴァナンタプラム市）

理念・組織・活動経緯

1996年に、SEWA Thiruvananthapuram₂の共同設立者である Vijayan（現事務局長）によって設立



「女性議員のためのワークショップ」：筆者撮影」

された女性資料センターである。設立のきっかけは、1995年の第5回世界女性会議（北京会議）前後に活発化した国内の女性組織のネットワーク化に関わり、ケーララ州がその社会開発の達成のかげで女性の地位をめぐる問題関心が希薄であった点が明らかになったことにある。この問題提起から、センター設立を主張した Vijayan が、フォード財団に認められ助成を受けることで稼働が可能となった。

「活動内容」

- ①資料センター（ジェンダーを争点とする研究／実践に関連した書籍・資料収集と、閲覧）
- ②ジェンダー・トレーニング（ジェンダー問題のブレインストーミング、女性の社会的地位や労働についての社会史的分析、意識高揚プログラムなど）
- ③出版活動（ニュースレターと特別出版）
- ④翻訳（知識のローカル化）
- ⑤州内の女性組織・研究組織・関心を持つ個人のネットワーク化（ケーララ女性ネットワーク）

その設立根拠として、第一にケーララ州内での女性組織活動とネットワーキングの不十分さを、第二に高度に政治化した社会環境を挙げている。前者については、社会開発が女性の地位の高さを自動的に保障しているという誤認識が、ケーララのジェンダーをめぐる問題を争点にすることを妨げてきたという反省があるという。また、政治化された土壌を背景に、あらゆる行為が政治的癒着という解釈枠でなされることで、ジェンダー問題を取り扱う際にもそれが障害になるという。

近年の活動の特徴

- ①若年層の支援
- ②パンチャーヤトの女性議員の支援
- ③ジェンダートレーニング

④女性・女兒に安全な都市イニシアティブ³⁾

「パンチャーヤティ・ラージとジェンダー」

この展望の中で、近年関わった活動として、最も顕著なものが②の女性パンチャーヤト議員支援である。

拙稿 [喜多村 2008] で述べたように、インドは1992年の憲法改正で、地方議会議席の3分の1を女性に割り当てる女性留保枠の導入を開始した。これにより州以下の議会に60万人以上の女性議員が誕生し、ローカル・ガヴァナンスの担い手として登場している。喜多村が指摘したように、女性が議員となることで、住民生活の実践的ジェンダーニーズの掘り起こしにおいては、ある程度その成果が見られたが、議会の家父長的運営や女性の経験不足、家庭責任などから、女性が議員として十分に機能する上で困難な状況も報告されている。

この分権化による女性留保枠導入期に、SAKHI はスイス開発協力庁(Swiss Agency of Development and Cooperation: SDC) が基金提供をして設立された時限付 NGO である CapDeck (Capacity Development for Decentralization in Kerala) と共同で、パンチャーヤトとジェンダーに関する多くの調査、出版と能力開発トレーニングを実施してきた。そのうちの主たる活動について検討する。

「ジェンダーの地位調査」

この調査は、コミュニティにおける男女格差の実態を、質問紙調査により明らかにする試みである。SAKHI は CapDeck との分権化推進のための共同プロジェクトで、この調査を村落ベースで実施し、国勢調査や NSS など大規模調査や標本調査では見えにくいジェンダーをめぐる地域差を明らかにしている。

将来的には、各グラム・パンチャーヤトで調査チームを組織し、ジェンダーに関する事前講習を受けた後に、質問紙調査の実施と分析、報告書の作成を踏まえて、パンチャーヤトガヴァナンスへの提言というプロセスが望まれる。

「ジェンダーとパンチャーヤティ・ラージ」

パンチャーヤト法、行政運営、予算策定、など、地方行政に関わる項目が含まれる。州地域行政研究所 (Kerala Institute of Local Administration: KILA) が、新議員を対象とした技能研修を行っているが十分ではなく、その補完研修を SAKHI が実施してきた。

「Jagratha Samithi (ジェンダー監視室)」

コミュニティにおけるジェンダーに起因するさまざまな問題の調停機関。村長と担当女性議員、福祉ワーカー、弁護士、などにより構成され、当事者の陳述に基づき審議し調停を行う。この調停が成立しない場合、上位機関としての州女性委員会に調停が委ねられる。

「可能性」

ネットワーキングが女性のエンパワーメントに不可欠の要素であることは強調されて久しいが、「進んだ州」であるはずのケララでの取り組みが遅かった点は、冒頭で述べた。この点で、T市

とその周辺地域そして州内と国内、ひいては国際的な動きと連動させるための試みは、このケーララという特殊な社会開発の達成（たとえば高い識字率など）を背景に持つことは運動の推進にプラスに働くであろう。

コミュニタリアンの領域に関する考察

SAKHI は、女性・ジェンダーに関する資料情報センターであり、調査・啓蒙活動や各種の技能指導を中心として成立している組織である。その点、SEWA に見るような、コミュニティベースの経済的自立と意思決定における自立を目標に会員中心のダイナミックな組合運動や、インフォーマルな相互学習を通してのエンパワメントが可能となる組織的展開はない。しかし逆に、ケーララ州初の女性資料センターとして、国内の同様の資料センターとのネットワークを通し、また助成資金獲得に国内外の開発機関が求める極めて高度な基準に応えつつ、女性・ジェンダーに関する新たな知見や実践を一般に普及させる活動を幅広く行い、女性の地位向上や家族に関する言説形成と実践に寄与してきた点は評価されよう。特に女性留保枠導入と分権化における女性の政治経済参加に関して、幅広い汎用性を持った実績を蓄積している。つまり、ジェンダーの地位に関する調査をはじめとし、議員講習用マニュアルの整備、ジェンダー予算による WCP（女性プログラム）の批判的検討とジャグラタ・サミティ（ジェンダー監視室）の設置指導など、である。

おわりに

Chang が提示した「圧縮された近代」論を、インドに適用した場合見えてくる特徴について、特に Chang が韓国において指摘した「家族再編成」と求められる社会的紐帯としてのコミュニタリアンの領域の生成を争点化し、ボランタリー・セクターの創出をその事例とともに論じた。

Chang の議論が韓国社会における加速された近代化過程の負の側面を中心に展開しているのに対し、筆者はインドにおいては韓国同様、現在「圧縮された近代」化は進行中としながらも、植民地支配期に「跛行的近代」ともいうべき近代化を経験し、その意味において二段階の近代化過程が認められること、前者は必ずしも圧縮された形態ではなく、その後のインド社会の発展の基盤として接合している点を指摘した。

そのプロセスを、Chang が韓国社会にその欠如を指摘したコミュニタリアンの領域において検討を加え、多くの組織を生み出し、「NGO 大国」とまで言われる今日のインド社会のボランタリー・セクターをその特徴として示した。植民地期に支配者イギリスとインドのネゴシエーションを通じて生じた組織化の延長上に、SEWA や SAKHI の活動がある。その活動や規模は、それぞれが拠点とする州のエートスに影響され展開されている。

この論考が Chang の議論に対し示唆する点は、韓国社会における「圧縮された近代」期以前の近代期の考察と、地域差の考察である。韓国の植民地期における近代化プロセスを「圧縮された近代」論に接合させ、理論をさらなる精緻化を図るという点が、今後の検討されるべき課題であろう⁴⁾。

さらに筆者がインドの近代をめぐる論考を進める上で、まさに現在進行中の「圧縮された近代」

現象をめぐり、家族政経論を含めさらに包括的に検討することが今後の課題である。

「注」

- 1) 新経済計画年度に向けて、女性議員の開発計画策定に関する能力開発研修として SAKHI が開催した。この他に、ジェンダーセンシティビティ研修、ジェンダー予算研修など、多くの研修をこの女性組織は実施している。
- 2) SEWA Thiruvananthapuram は SEWA Gujarat の姉妹組織である。SEWAGujarat が零細自営業を「労働」と主張し労働運動を展開しているのに対し、前者は零細自営で失職した女性労働者支援との新たな職業の創出活動に重点が置かれている。
- 3) 2010年。基金元はフォード財団によるプロジェクトである。
- 4) 90年代以降、韓国ではジェンダー格差解消をターゲットとする政府や教育機関、NGO の活発な取り組みが見られる。女性省の誕生、ジェンダー予算の導入、DV 防止法、女性・ジェンダー研究の拡大、NGO によるさまざまな政策提言や女性支援活動がそれである。

参考文献

Chang, Kyung-Sup

1999 Compressed Modernity and its Discontents: South Korean Society in Transition, *Economy and Society*, 28: 1, pp.30-50.

2010 *South Korea under Compressed Modernity: Familial Political Economy in Transition*, Routledge.

Devika, J. et al

2008 *Gendering Governance or Governing Women? Politics, Patriarchy, and Democratic Decentralisation in Kerala State, India*, CDS Report.

Devika, J. and Binitha B.Thampi,

2007 Changing Regimes of Empowerment and Inclusion in the Public: Women and the Kudumbashree in Contemporary Kerala, in M.A. Oommen (ed.) *A Decade of Decentralisation in Kerala: Experience and Lessons*, Institute of Social Science, Har-Anand Publications Pvt Ltd, pp.175-208

Eapen, Mridul,

2007 Gender Budgeting and Decentralized Governance, in M.A. Oommen (ed.) *A Decade of Decentralisation in Kerala: Experience and Lessons*, Institute of Social Science, Har-Anand Publications Pvt Ltd, pp.209-244.

Integrated Rural Technology Centre

2004 *Gender Profile in Kerala*, Ministry of Women & Child Development, Ministry of Human Resource, GOI.

Isaac, T.M. Thomas,

2005 Women Elected Representatives in Kerala (1995-2000): From Symbolism to Empowerment in L.C. Jain (ed.) *Decentralisation and Local Governance*, Orient Longman, pp.366-416

Isaac, T.M. Thomas & R.W. Franke

2000 *Local Democracy and Development: People's Campaign for Decentralised Planning in Kerala*, Left Word,

喜多村 百合

2004 『インドの発展とジェンダー：女性開発 NGO による開発のパラダイムシフト』新曜社。

2008 「インド・ケーララ州における分権化政策と女性の政治・経済参加」筑紫女学園大学短期大学紀要 (No. 4) 109-118頁。

- Lister, Ruth
 1997 *Citizenship: Feminist Perspectives*, London:Macmillan 1997, p.38.
- Persis Ginwalla, MARAG&MAHILA SWARAJ ABHIYAN
 2008 *Samras Scheme and Democratization Process: An Analytical Study*.
- Mukhopadhyay, Swapna ,eds
 2007 *The Enigma of the Kerala Woman: A Failed Promise of Literacy*, Social Science Press.
- Oommen, M.A. (ed.)
 2007 *A Decade of Decentralisation in Kerala:Experience and Lessons*, Institute of Social Science, Har-Anand Publications Pvt Ltd.
- Omvedt, Gail
 1998 *Disturbing Aspects of Kerala Society*, BCAS.30(3), pp.31-33.
 2004 *Disturbing Aspects of Kerala Society*, Ananthapuri Message Board,
- Palanithurai, P, et all
 2009 *Networking of Elected Women Representatives at Glassroots*, Concept Publishing Company.
- SEWA
 2008 SEWA Annual Report (Website)
- SAKHI
 2004 *Gender and Decentralised Planning Kerala India*, SAKHI.
 2006 *Gender and Panchayatiraj: Status of Women in Kerala*.
 2009 *SAKHI Newsletter*, Volume 13. Issue 2 (in Malayalam), SAKHI.
- Singla, Pamela
 2007 *Women's Participation in Panchayati Raj: Nature and Effectiveness-A Northern India Perspective*, pp.260-273.
- Uma,Devi
 1994 *Women, Work, Development and Ecology*, Har-Anand Publications.
- Vijayan, Aleyamma,
 2007 *A Decade of Gender mainstreaming in Local Governance in Kerala*, in M.A. Oommen (ed.) *A Decade of Decentralisation in Kerala:Experience and Lessons*, Institute of Social Science, Har-Anand Publications Pvt Ltd, 2007, pp.141-174.
- Williams, Michelle
 2008 *THE ROOTS OF PARTICIPATORY DEMOCRACY Democratic Communists in South Africa and Kerala*, Palgrave Macmillan.
- Ministry of Panchayati Raj
<http://panchayat.nic.in/>
- SAKHI
<http://sakhikerala.org/>
- SEWA
<http://www.sewa.org/>
- State Poverty Eradication Mission
<http://www.kudumbashree.org/>